

2023年度入試

入学試験問題集

【応用心理学部 健康・スポーツ心理学科】



東京成徳大学

目 次

総合型選抜 9月入試 小論文	1
総合型選抜 10月入試 小論文	2
総合型選抜 12月入試 小論文	3
学校推薦型選抜（公募入試／指定校入試） 小論文	5
スポーツ特待生入試 小論文	7
出題意図	8

「一般選抜A日程・B日程・C日程」の問題は、
「2023年度入試問題集 一般選抜A日程・
B日程・C日程」に掲載しています。

● 総合型選抜 9月入試

【小論文】（試験時間：60分）

以下の文章を読んで、次の二つの設問に答えなさい。

人生においては、楽しい出来事ばかりではなく、苦しい出来事や困難な状況を数多く経験するものである。これら进行することは非常に難しく、むしろこれらを経験していくこと自体が生きることの重要な一部であるとさえ言えるだろう。

困難な状況は誰もが経験するものだが、それに対する反応は個人で異なり、大きく二つのパターンに分かれる。一つは、困難によって不適応を生じさせ、最終的に自分自身の存在意義を見失ってしまうようなものである。もう一つは、困難に適応的に対処することで乗り越え、人としての成長につなげるといったものである。それでは、個人のどのような性質や特性の違いが、反応の違いを生むのだろうか。

これを説明する心理的側面の一つが、「自己との向き合い方」である。つまり、困難な状況にいる自分自身とどのように関わるのかによって、その後の対処のあり方や、結果としての適応度が変わるのである。例えば、困難な状況に置かれた時、そのような自分を責めたり、自分と他人を比較したりして、自分自身の至らなさを厳しく評価するような態度があるだろう。「自分に厳しく、甘やかさない」という意味では美德のように教えられることもあるが、このような態度は抑うつ症状を強めてしまうことが示されている (Blatt & Blass, 1992; Thompson & Zuroff, 2004)。一方で、「思いやりを持って自分に接する」という関わり方も存在する。自己を批判するのではなく、愛情や理解をもって、心優しく接するという態度である。ここでは、困難に直面することや弱みを有することについて、自分ばかりではなく、皆に共通するものであると捉えることで自己を孤立させず、状況に対する必要以上の価値判断を行わないようにして、あるがままを保つのである。このような関わり方は「セルフ・コンパッション」と呼ばれ、良好な心理状態の維持に貢献することが研究により明らかにされてきている (貴志・庄司, 2022)。

誰もが人生において困難に直面するという事実は変わらなくとも、そのような状況に置かれた自己との関わり方によって、その後の体験や心理状態は変わり得る。また、自己との関わり方をどのようなものにしていくべきかという問題は、心理学における研究が続けられているとはいえ、最終的には個人やその個人が置かれている社会や時代の背景を見定め、選び取っていくことで解決されていくものであると言えるだろう。したがって、常に自己や社会、時代に対する理解を深め、自己との適応的な関わり方を探求していくことが重要である。

参考・引用文献

Blatt, S. J., & Blass, R. B. (1992). Relatedness and self-definition: Two primary dimensions in personality development, psychopathology, and psychotherapy. In J. Barron, M. Eagle, & D. Wolitsky (Eds), *The interface between psychoanalysis and psychology* (pp. 399-428). Washington, DC: American Psychological Association.

貴志光加里・庄司一子 (2022). セルフ・コンパッションに関する研究の動向と展望. *共生教育学研究*, 9, 115-126.

Thompson, R., & Zuroff, D. C. (2004). Levels of self-criticism scale: Comparative self-criticism and internalized self-criticism. *Personality and Individual Differences*, 36, 419-430.

設問1

本文の内容を要約せよ (160字以上200字以内)。

設問2

本文の内容を踏まえ、あなたの「自己との関わり方」について、具体的な経験を挙げながらその特徴を説明し、そのメリットとデメリットを具体的かつ論理的に述べよ (500字以内)。

● 総合型選抜 10月入試

【小論文】（試験時間：60分）

いじめ防止対策推進法（平成二十五年法律第七十一号）において、『いじめ』とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう」と定義されています。この法律において「学校」とは、学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）第一条に規定する小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校（幼稚部を除く。）を、「児童等」とは、学校に在籍する児童又は生徒をいいます。

以下の文章を読んで、次の二つの設問に答えなさい。

（定期的実施しているアンケート調査で、Bが「いじめを受けた」と回答した。そこで、Bと面談で確認するなどした結果、以下の事実があったことを確認できた。）

A、B、Cともに野球部に所属している。3人とも小学校からの経験者で周囲から期待されていた。練習の際に、Bがミスをする、そのたびにAはBにだけ聞こえるくらいの小さな声で「へたくそ」「またかよ」とつぶやいたり、あからさまな舌打ちをしたりしていた。練習が終わった後も、あいつが足を引っ張っていると、他の部員に話していた。A、B、Cの間に力の上下関係などもない。また、Aに悪意はなく、むしろBには期待していたため、ただ思ったことが口に出てしまっただけだった。しかし、それによりBはとても嫌な気持ちになった。見かねたCが「そんなことを言ったらかわいそうだよ」と言ったところ、Aはそれ以上言うのをやめ、それ以来、BはAから嫌なことをされたり言われたりしていない。その後、Bもだんだんと上達して、今では、A、Cとともに学年の中心メンバーとして活躍している。（文部科学省「いじめの認知」一部改変）

参考文献

文部科学省「いじめの認知」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/06/26/1400030_005.pdf

設問1

いじめ防止対策推進法の「いじめ」の定義に照らして、AのBに対する言動はいじめといえるか。理由を示して、100字以内で自分の考えを述べなさい。

設問2

「いじめの重大事態（いじめによって不登校、行き渋りや、生命、心身又は財産に重大な被害が生じた疑いがある場合）」を防ぐためには、どんなことが必要か。理由を示して、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

● 総合型選抜 12月入試

【小論文】（試験時間：60分）

以下の文章は、男子陸上選手としてオリンピック出場経験もある為末大（ためすえ だい）氏によって、インターネット上のブログ「Note」に公開された「スポーツが嫌いな人へ」と題された文章である（2022年3月28日公開、一部の表記を修正）。これを読んで、以下の設問に答えなさい。

引退してスポーツを離れて良かったのは、スポーツを嫌っている人や、憎んでいる人、やっていたけど傷ついている人がこんなにあつたのかと気付かされた事です。おそらくスポーツの世界だけにいたら、スポーツが好きの人と、スポーツによって成功体験を持つ人との接触が極端に多かったと思います。

そもそも私の人生は少し特殊でした。特殊だということに気がついたのも、引退して違う競技の方と話したからなのですが。小学生時代は読書部というところにおいて週に一回図書館で本を読んで読書感想文を出すということをしていました。足が速かったので社会的でクラスのリーダーっぽくはあったのですが、母親はいつも性格の第一番目を「繊細な子」と言っていたので、内向的だったんだと思います。運が良かったのは陸上部の先生が最初に「陸上競技と運動力学」という本を貸してくれたことです。「スポーツは科学であり、合理性を追求すれば強くなる」という考えがまず生まれました。

先生に対し意見を言って、議論することが当たり前で、自分の目標は目標シートに書いてそれをもとに先生と1対1でディスカッションして決めていました。権威に屈するという感覚が皆無のまま高校時代もその性格を許容されました。先輩に敬語を使ったことありませんし、中学時代は先生にも敬語ではありませんでした。おかげで世界大会で一番偉い先生に（今一番尊敬している先生ですが）ペットボトルを投げつけるなど大変問題のある選手になりましたが、それもおあらか？に陸上界には許容されました。

そのような人生でしたから、少なくともスポーツが嫌だなと思ったことは一度もありませんでした。ただ、スポーツ界にいたので、怒鳴っている長距離の監督や、大変な縦社会がある球技の世界を垣間見ることもあって、あれだったら絶対スポーツをやっていないなと思っていました。スポーツをやっている方々がスポーツを素晴らしいと感じることや、スポーツを楽しむことに引け目を感じる必要はないと思いますが、人生のスポーツ体験でひどい思いをして傷ついている人がいることはきちんと理解する必要があると思います。

既存のスポーツシステムはスポーツ好きも生まれましたが、スポーツ嫌いの方もたくさん生んできました。人間には好き嫌いがあるので、みんなが好きになることはありえませんが、ニュートラルな人間やましてやスポーツが好きだった人間を、スポーツ嫌いにさせてしまうことは大変な問題です。私が聞いた話では「スポーツは好きなのだけれど、スポーツ界の文化が嫌いだ」という声もありました。これは本当に重たく受け止めないといけないと思います。

スポーツは社会の価値観を増幅させる機能があると思います。増幅させるということは、抑圧文化を広めて人を萎縮させてしまうかもしれないし、個人の才能を伸ばし自主性を高めることもできるということです。ということはスポーツ界が社会のあるべき姿を想像してそこに向けて変わっていけば社会を変えることもできると私は信じています。

我が国最大の予算の使用先は社会保障費であり、医療費です。運動習慣と食習慣はこれに大きな影響を与えています。日本は国民皆保険を採用していますから、誰かの医療費を皆で負担し合う構造になっており、皆が健康でいることは国民全体にとっては正のインセンティブが働くこととなります。例えばスポーツが市場に委ねられているアメリカでは、親の経済格差が運動機会の格差になり、肥満率（これは食も関係しているので複雑ですが）につながり寿命格差につながっているというデータがあります。マイケルポーターが「医療戦略の本質」で予防は対処の数倍コストパフォーマンスが良いと言っていますが、まさにその予防の入り口に当たるのが体育だと私は考えています。

好きにならなくても、人生のどこかでスポーツは楽しいかもしれない、体を動かすと楽しいと感じてもらい、なるべく生涯にわたって運動を続けてもらう環境を作る責任がスポーツ界にはあると思います。既存のスポーツの形を一度とっばらい、あるべき社会の形からスポーツをもう一度作り始める必要があるのではないのでしょうか。

（文中の下線部は出題にあたって追加したものである）

出典：< <https://note.com/daitamesue/n/nf78ba24d43d7> >

設問1

この文章で述べられている為末大氏の考えを200字以内で要約しなさい。

設問2

「スポーツが嫌いな人」がいる中で、スポーツが「社会を変える」(文中の下線部)ためには、どのような対策や活動が必要だと考えるか。あなたが「嫌い」だと感じている事柄や活動とも関連づけながら、あなたの考えを600字以内でできる限り具体的に論じなさい。

●学校推薦型選抜（公募入試／指定校入試）

【小論文】（試験時間：60分）

以下の課題文および資料を読んで、後の設問に解答しなさい。

世界保健機関（World Health Organization）は1948年にWHO憲章の序文において健康を以下のように定義した：
Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.^{注1}

もともと医学では生物医学モデル（biomedical model）に基づいて病気の原因を探り、治療を行ってきた。生物医学モデルは病気に対する科学的アプローチとして生物学的特性に焦点を合わせており、行動的、心理社会的要因を軽視したものであった（Engel, 1977）。20世紀初頭までは細菌やウイルスによる感染症が原因で死亡する者が多く、生物医学モデルに基づいて病気の原因を解明し、治療方法や医薬品を開発することによって医学は発展してきた。一方、現代では、がん、心臓疾患、脳血管疾患などの生活習慣病や、平均寿命が延びた結果として老衰や肺炎によって死亡する者が増加した。そのため、生物医学モデルの恩恵を活かしたうえで、心理社会的観点に基づいた病気へのアプローチが必要となってきた。

健康心理学は生物心理社会モデル（biopsychosocial model）に基づいている。生物心理社会モデルでは生物学的要因、心理的要因、社会的要因が複合的に作用して健康と疾病が生じると考えるものである（Engel, 1977）。生物心理社会モデルには人間を単なる生物学的な存在としてではなく、心理的、行動的、社会的側面も含めて全人的に理解しようとする背景がある。生物学的要因として、細胞、神経、遺伝的素因などがある。心理的要因として、ストレス、感情、パーソナリティ、信念、認知傾向などがある。社会的要因として、学歴や所得などの社会経済的状況、雇用形態や職種などの労働環境、家族、友人、同僚、専門家などが提供するソーシャルサポートなどがある。ソーシャルサポートはストレスが及ぼす悪影響の軽減をもたらす。また、生物心理社会モデルでは疾病と健康の連続性を強調している。年齢や性別、疾病や障がいの有無を問わず、誰もがウェルビーイングの向上を目指すことができるのである。

ウェルビーイングの向上を目指すうえで、健康意識を高めて自らの健康の保持・増進と、疾病の予防行動が重要となる。予防行動には1次予防と2次予防と3次予防がある（Kaplan, 2000）。1次予防は生活習慣を改善して健康を増進し、生活習慣病等を予防することなどである。2次予防は健康診断等による早期発見・早期治療などである。3次予防は疾病の発症後、治療を受けて機能の維持や回復を図ることなどである。健康的な生活習慣を習得し、継続することが理想的であるものの、私たちは不健康な生活習慣になりがちである。予防行動は「川の上流志向」にたとえられる（McKinlay, 1979）。川の上流にはたばこやアルコール、塩分含有量の多い加工食品などの「病気の工場」があり、人々は川に突き落とされそうになる。人々が川に落ちる原因は所得、学歴、職業、性別、居住地など健康の社会的決定要因であり、健康格差につながるものである。川に落ちておぼれた人を川下で助けるのではなく、川に落ちた人をすぐに助ける、あるいは川に落ちないように川の上流の環境を整備したいのである。したがって、健康の保持・増進のためには個人の行動変容に加えて、健康格差の縮小や是正のために健康教育や健康政策が必要となるのである。

注1 infirmity 病弱、虚弱

引用文献

Engel, G. L. (1977). The need for a new medical model: A challenge for biomedicine. *Science*, 196, 129-136.

Kaplan, R. M. (2000). Two pathways to prevention. *American Psychologist*, 55, 382-396.

McKinlay, J. B. (1979). A case for refocusing upstream: The political economy of illness. In: E. G. Jaco (Ed.), *Patients, Physicians, and Illness*. New York: Free Press, 9-25.

設問 1

生物心理社会モデルとの共通点を考慮してWHOの健康の定義を説明せよ（200字以内）。

設問 2

生物心理社会モデルと1次，2次，3次の予防行動に基づいて，健康の保持・増進を目指すために，医療従事者ではない私たちができる実現可能性の高い行動について説明せよ（600字以内）。

●スポーツ特待生入試

【小論文】（試験時間：60分）

以下の文章を読んで設問に答えなさい。

「より速く、より高く、より強く」－これは、オリンピックのモットーとして広く知られている言葉です。このモットーは、1894年の国際オリンピック委員会設立時の会議で、「近代オリンピックの父」と呼ばれるピエール・ド・クーベルタンによって提案され、採択されました。このモットーは、単に記録や勝敗を競って勝利や成功を収めること、という意味ではありません。しかし、競技スポーツでは、長きにわたり勝利至上主義や勝利優先主義が礼讃されてきました。そして、競技スポーツの最大の目標は勝つことであり、結果がすべてであるといった風潮はいまだ根強く残っているように思われます。そのような中で、クーベルタンが意図した「より速く、より高く、より強く」の本来の意味は、見失われつつあるように思うのです。

また、選手の周囲の人々も、選手が勝つことや、より良い成績を残すことに期待を寄せがちです。トップレベルの選手が試合に負けた時のインタビューで、「期待に応えられませんでした」とコメントする場面を、みなさんも一度は目にしたことがあるのではないのでしょうか。もしくは、結果を残せなかったドラフト1位入団のプロ野球選手に対して、「期待外れのドライチ」などという言葉が浴びせられることもあります。競技スポーツにおいて、選手は常に結果を問われ続けているのです。

そして選手は、より速く走ること、より高く跳ぶこと、より強く身体を強化することだけでなく、より美しく演技をすること、より遠くに飛距離を伸ばすこと、より完璧にプレーすることを追い求め、日々の過酷なトレーニングに身を投じていきます。家族や友人との時間や学業に勤しむ時間を犠牲にして、身体的あるいは技術的な向上のために膨大な時間を練習に費やすのです。

残念ながら、競技スポーツの試合においては、勝つ選手よりも負ける選手のほうが圧倒的に多いのが現実です。一度も負けたことがない選手などももちろんいないでしょうし、屈辱を味わったり、打ちのめされたりしたことは、どんな選手でも一度や二度はあるものです。だからこそ、勝ち負けという単なる結果ではなく、スポーツをする価値を、今こそ問い直す必要があるのではないのでしょうか。日本のスポーツ心理学の礎を築いた一人である徳永幹雄氏は、「いかにして勝つか、負けるか、そしてスポーツをする価値をもう一度考える必要がある」と述べています。

（出典：スポーツ選手のためのアドラー心理学、内田若希、大修館書店より一部改変）

設問

スポーツにおける価値とは何であるか、そして、その価値を享受するためには、学業やクラブ活動に対してどのような姿勢で向き合うことが必要であるか、あなたの考えを600字以上800字以内で述べなさい。

● 出題意図

総合型選抜 9月入試【出題意図】

設問1

課題文を読解する能力、ならびに指示された内容を的確に要約し記述する能力を評価する。

設問2

前問で示した理解を踏まえた上で「自己との関わり方」を自己分析し、自身の経験を挙げながら、その特徴ならびにメリット・デメリットを具体的かつ論理的に述べられるかどうかを評価する。特に、「自己との関わり方」に絶対的な正解はなく、個人や時代背景等によって、どのような関わり方が適切であるかは変化し得ることを踏まえて記述できている場合、高い評価を与える。

総合型選抜 10月入試【出題意図】

高等学校で身に付けた基本的な学力をベースに理解、思考、判断、表現ができ、かつ将来の自他の健康支援に向けて主体性や論理性の発揮が期待できる力を判断するために、設問で問われていることを的確に理解すること、理解した内容を自分なりの考えに基づきわかりやすく表現できているかどうかを評価する。

本問においては、身近な問題である「いじめ」について、いじめ防止対策推進法のいじめの定義の文章を読んで正確に理解し、定義を使って事例を判断することができるかどうか、また、それを踏まえて「いじめ」を自分の問題としてとらえ主体的に解決策を考えることができるかどうか、その考えを論理的に表現できるかどうかについての解答を求め、それについて評価される。

設問1

いじめの定義は何度かの見直しがなされ、現在のいじめ防止対策推進法においては被害者の心情のみに注目されている。かつてのように、悪意や意図、その後の人間関係への影響などは考慮されないなど、日常生活での感覚とは異なる印象が持たれる場合も多い。これらに影響されることなく、定義の文章を手掛かりに事例を判断するためには、高度な読解力、理解力、論理性などが必要になる。身近な問題である「いじめ」について、いじめ防止対策推進法のいじめの定義の文章を読んで正確に理解し、定義を使って事例を判断できるかどうかについての解答が求められる。

設問2

設問1を踏まえると、悪意のあるいわゆる「いじめ」をしないようにするだけでは心身の苦痛を排除することはできない。むしろ、「いじめ」を認知し、それが重大事態を引き起こさないようにすること、「いじめ」をより豊かな人間関係を育てる機会ととらえることが重要である。そういった視点で、自分の問題としてとらえ主体的に解決策を考えることができるかどうか、その考えを論理的に表現できるかどうかについての解答が求められる。

総合型選抜 12月入試【出題意図】

本学科の求める学生像として「自他の心身の健康を守り、育てることに興味・関心のある人」が挙げられている。これを実現するための一つの観点として、スポーツをいかに活用可能かという方略を深く考察し、自身の考えを説得的に述べるができる力が期待される。本学科の志願者は、高校時代に運動部に所属し、自身もスポーツを愛好してきた者が多いが、そのスポーツを「嫌い」と捉える者がいる。スポーツが持つ様々なポテンシャルを広く社会で有効に活かすためには、それを「嫌い」と捉える人々に対する眼差しも重要である。一方で、スポーツを「嫌い」という他者に対してその良さを訴求するには、自分自身が「嫌い」と考える何らかの活動に対する意味づけや取り組み方にまず目を向ける必要がある。本問は、自身が「嫌い」な課題に対する省察的観点を踏まえながら、スポーツを「嫌い」と捉える他者への動機づけの具体的な提案を求めるものである。

学校推薦型選抜（公募入試／指定校入試）【出題意図】

設問1

WHOの健康の定義を理解できているかどうか、生物心理社会モデルとの共通点を適切に説明できているかをみる。

設問2

一般的な知識として食事、運動、睡眠、ストレス等の重要性を述べるのではなく、生物心理社会モデルと予防行動に基づいて、論理的に述べているかをみる。健康の保持・増進のために、「川の上流志向」を考慮して、病気の早期発見、早期治療の前に、1次予防を重視する必要があること、病気の原因として生物学的要因だけでなく、心理社会的要因であるストレスやソーシャルサポートが重要であること、生活習慣病予防のために食事、運動、睡眠など望ましい生活習慣の獲得が必要であること、学歴、職業、所得などの社会的決定要因の影響等について言及していることを重視する。

スポーツ特待生入試【出題意図】

スポーツ特待生入試で入学を希望する者は、大学運動部活動において活動をする者であるが、大学生アスリートである前に、大学生として学業に励むことが求められる。しかし、「強ければ良し、勝てなければ価値はない」や、「競技に専心しているので学業が疎かになるのはしょうがない」といった偏った価値観、風潮は未だ残っている。

こうした課題に対して、スポーツ特待生入試を受験する受験生の関心の高さや認識、そうした課題の本質を理解した上で、あるべき学生アスリート像を考える力、自分なりの考えに基づいてそれらをわかりやすく表現する力などを見る。

本問においては、競技スポーツに関する文章を読んで、問われていることを正確に理解し、その問いに対する考えを主体的に考え、論理的に表現できるかどうかについての回答を求める。